

令和7年8月10日からの大雨時における水防本部・災害警戒本部
の体制及び活動に関する検証委員会 第1回会議 議事要旨

(1) 本委員会の設置経緯について

- ・事務局から議事資料をもとに説明

(2) 本委員会における検証の進め方について

- ・事務局から議事資料をもとに説明

(3) 大雨時における水防本部・災害警戒本部の体制及び活動について

- ・危機管理防災部及び事務局から議事資料をもとに説明

(4) 水防本部・災害警戒本部の大雨時の対応に関する課題の整理について

(会長)

今回の課題について皆様から順にご意見をいただきたいと思います。

(委員)

課題として、通常行うべき訓練や研修が行われていない点が挙げられます。実施されなかった理由として人事異動によるとのお話でしたが、本来やるべきことがそのような理由でできなくなるということは、属人性が高く組織として機能していないと言えます。属人的な業務を洗い出すことが必要だと考えます。

また、仮に訓練が実施されていたとしても、事前にサイレンの吹鳴に関連すること自体が認知されていなければ、今回と同様の課題は発生したと思われます。過去の訓練の振り返りで出た課題や他の災害からの教訓を、マニュアルへ適切に記載することが必要です。

対応策のひとつとして、危機管理部署の経験者を呼び戻す仕組みを制度化するとよいのではないのでしょうか。

(委員)

1点お尋ねしたいのですが、今回問題として対象になっている坪井川と井芹川について、流域の地元の方との訓練等は行われていたのでしょうか。

(危機管理防災部)

地域と連携した訓練は実施できておりませんでした。

(委員)

資料を見た大きな感想として、運用面において不明瞭な部分が多く、特に「基準がない」といった点に課題を感じました。また、防災担当部署のみならず、応援に来る職員も含めて、サイレンに対する認識が十分ではない印象を受けました。

現在は、今回のような線状降水帯が頻発する状況となっており、他都市の対応事例を研究し、熊本市の防災体制に取り入れることが有効ではないかと考えます。

さらに、地元住民との防災訓練が実施されていないとのことでしたが、サイレンを受ける側である住民の認識も非常に重要です。サイレンが鳴った際に住民が混乱し、かえってリスクが高まることのないよう、「どのような状況で、どのようなサイレンが鳴り、その際にどう対応すべきか」といった情報を、地域の防災訓練などを通じて平時から周知しておく必要があると感じました。

(委員)

やはり、防災対応において訓練は極めて重要であると改めて感じました。

加えて、各部署で発生したヒヤリハット事例を集約し、それをマニュアルに反映させる仕組みを構築することが有効です。現場での気づきや課題を共有し、改善につなげることで、より実効性のある対応が可能になります。

また、気象状況は急変する可能性があるという前提を常に持ち、柔軟かつ迅速に対応できる体制を検討・整備しておく必要があります。

(委員)

まず、マニュアルにサイレン吹鳴の基準が記載されていないのであれば、現場でサイレンを鳴らす判断ができないのは当然のことです。加えて、先ほどの説明では、実際の運用においてサイレン吹鳴の実施には管理職の判断が必要とされていましたが、これはあくまで基準に達する前の例外的な対応とすべきであり、基本的には明確な基準に基づいて運用することが適切であると考えます。したがって、水位等に基づく明確な吹鳴基準をマニュアルに定めることが必要です。

また、市職員は人事異動により2～3年で入れ替わることが一般的であり、これは避けられないことです。そのため、研修を個人任せにするのではなく、組織として計画的に時間を確保し、継続的に実施する体制が求められます。

体制面については、大雨当日に予定以上の人員が勤務していたとのことですが、人員が増えるほど指揮系統が複雑になり、統率が難しくなります。そのため、誰が来ても円滑に動けるよう、指揮系統を明確化し、役割分担に応じた複数のマニュアルを整備することが有効と考えます。

さらに、当日に業務が滞った原因について、具体的にどのタスクが影響したのかが不明確であるため、そこを明らかにする必要があります。

(会長)

サイレン吹鳴に関しては、職員間で認識の違いが生じないように、マニュアルの記載方法を見直す必要があります。曖昧な表現や判断を個人に委ねる内容ではなく、具体的かつ統一的な基準を設けることが重要です。

加えて、サイレン吹鳴を自動化するシステムの導入も有効な手段と考えます。気象情報や避難情報と連動した自動吹鳴により、人的判断のばらつきを減らし、迅速な対応が可能になります。

また、すべての災害をマニュアルで網羅することは現実的に困難であるため、災害対応の根本原則を定め、それに基づいて柔軟に対応できる人材の育成が不可欠です。状況に応じた判断力と行動力を持つ職員を育てることで、マニュアルにない事態にも的確に対応できる体制が整います。

(委員)

スピーカー自体のアップデートや、サイレンの自動化は今後される予定はあるのでしょうか。

(危機管理防災部)

スピーカーの機能向上について、現在準備を進めているところです。

また、河川の水位に応じたサイレン吹鳴の自動化について、現在検討を進めているところです。

(会長)

皆様ありがとうございました。

(5) 次回の議事について

(会長)

次回は、本日議論いただいた内容に関する課題を整理して、実効性のある対応策について議論したいと思います。

次回についても、本日お聞きいただいたとおり本件では内部情報が出てきますし、我々も率直な意見交換できると思いますので、引き続き非公開とさせていただきますと思いますが、よろしいでしょうか。

(委員)

異議ありません。